

言語交流プログラム体験記 ～文学が好きな二人の日韓言語交流体験記～ SEO HANMIN (ソ・ハンミン)

こんにちは。経営学部2年生の韓国人留学生、ソ・ハンミンです。私は日本へ留学に来る前、韓国で一度大学に進学し、韓国の国語国文学を専攻していたという少し変わった経歴を持っています。昔から文学や物語を読むことが大好きでした。本プログラムに参加する前から日本語でのコミュニケーションには全く不自由していませんでしたが、結果としてこの語学力が、後にパートナーと両国の文学や文化について深く語り合うための強固な土台となってくれました。

このように日本語にはそれなりの自信があったにもかかわらず、私が本プログラムに参加した最大の理由は、他でもない「常識」や「文化的背景」に対する強い知的好奇心でした。日本語をスムーズに話し、留学生活を送っていても、ネイティブである日本の方々が当たり前のように知っている話、例えば桃太郎のような昔話や源氏物語といった古典文学などを、実は自分が全く理解できていないことに気がついたのです。これは単に机に向かって勉強するだけでは身につかないものであり、親切な現地の友人と積極的に深い対話をしてこそ得られる知識だと考えました。

また、私は韓国と日本が互いをより深く理解し、最も親しい国同士になることを夢見ています。韓国に興味を持ってくれている人たちに、私たちの言語や文化を正しく伝え、両国の未来を繋ぐ「一歩」になりたいと思っていました。自分にとってはあまりにも当たり前の韓国の常識や文化が、日本の人々の目にどう映り、どう伝わっているのかを知りたいという思いもありました。また、もし上手く伝わっていなかったり誤解されたりしている部分があれば、私が直接、正確に伝えたいと考えていました。

こうした期待を胸に出会った私のパートナーは、文学部2年の加藤早絢さんでした。早絢さんは明治大学で韓国語を第二外国語として学んでおり、基本的な単語や簡単な日常会話ができるレベルでした。会う前は、果たしてどんな人だろう、話は弾むだろうかと少し緊張もしていましたが、実際に対面した彼女はとても優しく、明るい雰囲気を持った人で、おかげで私の緊張も自然と解けました。何より、最初の会話で偶然にもパートナーがかつての私と同じ文学部に所属していると知った時の喜びは忘れられません。文学を愛する者として、文学部のパートナーとマッチングされたことが本当に嬉しく、そのおかげで初対面からすぐに打ち解けることができました。私の日本語と早絢さんの韓国語の基礎力があったからこそ、私たちは単なる言語交換にとどまらず、両国の独特な表現や文化、そして文学についての深い話を交わす方向へと交流を進めていきました。

私たちはLINEで日常的に連絡を取り合い、週に1回ラーニングスクエアのブースを予約して定期的に会うようにしました。交流を重ねるにつれ、彼女は第一印象通り、優しくて文学への関心が深い素敵な友人だとさらに確信しました。会うたびに、お互いに準備してきた自国の文化や文学の話を紹介し合いました。私はキム・ソウォルやユン・ドンジュといった韓国の現代詩を、早絢さんは俳句や短歌といった日本の伝統詩歌を教えてくださいました。彼女はとても感受

性が豊かで、私が紹介した、初めて触れるはずの韓国の詩や物語の主人公にすぐ感情移入し、真剣に耳を傾けてくれたのがとても印象的でした。最も心に残っている思い出の一つは、お互いの詩に含まれる翻訳が難しい特有の詩的表現を、ありとあらゆる例えや身振り手振りを交えて説明し合った瞬間です。言葉の壁を越え、相手に理解してもらえるよう情熱的に説明し、また理解しようと努めるその過程が本当に楽しかったです。

そしてこの交流のハイライトは、最後の集まりの頃お互いの言語で名前を付け合ったことです。早絢さんは私に、「永遠に明るくあるように」という意味を込めて「園田晴久」という名前を贈ってくれました。当時、テスト期間で心身ともに疲れていた私にとって、その名前に込められた意味は本当に大きな慰めと力になりました。私は、早絢さんが多彩な性格を持ち、どんな物語にもすっかり没頭する姿から着想を得て、多様で美しいという意味を持つ「カン・チェア」という韓国の名前をプレゼントしました。

このような心の交流だけでなく、お互いの固有の文化を深く理解していく過程も非常に興味深いものでした。早絢さんが教えてくれたかぐや姫や桃太郎などの話を通じて、日本の伝統的な物語はおじいさんとおばあさんが登場し、偶然子どもを拾うというところから始まるケースが多いという、面白い共通点に気づきました。また、源氏物語に触れたことで日本文化への理解も深まりました。現代人の感覚からすると、源氏物語の複雑な恋愛関係は理解しがたい部分もありましたが、不思議なことに、物語の中の誰も絶対的な悪人のようには感じられませんでした。ここから、多様な人間像を肯定し受け入れる、日本文学特有の人間観を垣間見ることができました。

文学を通じた文化理解に加えて、日常的な言葉そのものから得られる面白い発見もありました。韓国語と日本語は語順が同じで、表現が似ている部分が本当にたくさんあります。しかし、韓国語では直訳すると「火を消す」と言うのに対し日本語では「電気を消す」と言い、韓国語では直訳すると「薬を食べる」と言うのに対し日本語では「薬を飲む」と言うように、日常的な言い回しにおいて微妙でありながらも面白い違いが存在します。こうした些細ではあるものの興味深い言語的な違いを、早絢さんに直接説明し、伝えられたことがとても楽しかったです。何より私にとっての最大の収穫は、一人でいくら日本語を勉強してもなかなか触れる機会がなかった古文の表現やニュアンスを、文学を通じた交流の中で少しでも聞き、学べたことでした。

こうした充実した言語交流をベースに、私たちはお互いの伝統文学をさらに深く比較してみる時間を持ちました。十数回の集まりを通して、日本の源氏物語と韓国の古典小説である春香伝を比較し、深い考察を交わしました。主人公であるチュンヒャンとイ・モンリョンの真実の愛の物語を、早絢さんはとても興味深そうに聞いてくれました。この二つの作品を比較しながら、それぞれの国の伝統文学で求められる態度や思想が大きく異なることに気づきました。節操や貞操を最優先の価値として強調する韓国の恋愛物語と比べると、もし朝鮮時代であったなら、源氏物語のように多彩な恋愛模様を描いた書物は禁書に指定されていたかもしれません。しかし日本では、むしろ当時の天皇や貴族たちにも広く愛読され、受け入れられていたという歴史的背景があることが非常に興味深かったです。この比較を通じて、逆に韓国固有の儒教的価値観や、私たちの伝統文学が持つ、まっすぐで力強い魅力を客観的な視点から再確認し、肯

定することができました。

このような貴重な経験を振り返りつつ、今後このプログラムに参加される皆さんにぜひ伝えたいことがあります。言語交流プログラムを、単なる語学の勉強の延長線としてだけ捉えないでほしいということです。言葉は互いを深く理解するための道具に過ぎません。私たちが文学という共通項で深い話をしたように、皆さんもそれぞれが好きな趣味や関心事をベースに会話を広げてみてください。お互いの文化や常識、背景を理解しようと努力する過程で、語学力は自然と身につくだけでなく、一生付き合える大切な友人を得ることができるはずです。外国の友人に自国の文化を伝え、また彼らの文化を学ぼうとする皆さんのその小さな一歩が、将来、両国を最も親しい国同士として結ぶ頑丈な架け橋になると確信しています。恐れることなく、存分に楽しんでください！

最後に、私と共に忘れられない文学的な心の交流を深めてくれたパートナーの早絢さん、そしてこのような素晴らしいプログラムを企画し、大切なご縁を結んでくださった大学関係者の皆様に心より感謝申し上げます。



(続きのページもう少し写真を添付します)

